

## さあ、出直そう！

[ヨハネによる福音書 1章 19～34 節]

さて、ヨハネの証しはこうである。エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人たちをヨハネのもとへ遣わして、「あなたは、どなたですか」と質問させたとき、彼は公言して隠さず、「わたしはメシアではない」と言い表した。彼らがまた、「では何ですか。あなたはエリヤですか」と尋ねると、ヨハネは、「違う」と言った。更に、「あなたは、あの預言者なのですか」と尋ねると、「そうではない」と答えた。そこで、彼らは言った。「それではいったい、だれなのです。わたしたちを遣わした人々に返事をしなければなりません。あなたは自分を何だと言うのですか。」ヨハネは、預言者イザヤの言葉を用いて言った。「わたしは荒野で叫ぶ声である。『主の道をまっすぐにせよ』と。」遣わされた人たちはファリサイ派に属していた。彼らがヨハネに尋ねて、「あなたはメシアでも、エリヤでも、またあの預言者でもないのに、なぜ、洗礼を授けるのですか」と言うと、ヨハネは答えた。「わたしは水で洗礼を授けるが、あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる。その人はわたしの後から来られる方で、わたしはその履物のひもを解く資格もない。」これは、ヨハネが洗礼を授けていたヨルダン川の向こう側、ベタニアでの出来事であった。その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。『わたしの後から一人の人が来られる。その方はわたしにまさる。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。わたしはこの方を知らなかった。しかし、この方がイスラエルに現れるために、わたしは、水で洗礼を授けに来た。」そしてヨハネは証した。「わたしは、“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証したのである。」

### [1] 400年間の空白

バプテスマのヨハネは、旧約聖書と新約聖書の橋渡しの役割を果たす人物だと言えると思います。旧約聖書の最後の預言者はマラキですが、その後は預言者はパッタリと途絶え、このヨハネが登場するまでの期間は400年程と言われていきます。一世代を40年間と考えたとして、10世代。かなりの長さですよ。その間、神様は預言者をお送りになりませんでした。けれども律法の専門家や、祭司

たち、つまり宗教の専門家はいた訳ですよ。その中には勿論ザカリアのような誠実な人もいましたが、これだけ歴史が動かない中にあると、信仰も形骸化したり、権力を持つことで安穩としてしまうということも容易に想像が出来ます。私たちも、一体神様は今何を考えておられるのか分らないと眩くことがありますけれども、神様がおられない訳ではなく、**私たちには見えない御計画があるのだ**と思います。事実、神様は何もなさらないどころか、私たちのために**イエス・キリスト**を2000年前に送って下さったではないですか。神様は生きておられます。

…400年間の空白。新たな神様の言葉は届いて来ない。けれどもそこにバプテスマのヨハネが現れました。ルカ福音書にあります、彼は祭司**ザカリア**と妻**エリザベト**の子ですね。子供など与えられないと思っていたエリザベトに神様が与えた男子です。このことは、あの**マリア**にも勇気を与えたのです。あの受胎告知の時に天使が言いました。「あなたは男の子を生む。その子をイエスと名づけなさい。…あなたの親類のエリザベトも年をとっているが、男の子を身ごもっている。もう6ヶ月になっている。神に出来ないことは何一つない」。それを受けて、あのマリアの大胆な告白が生まれたのです。「**マリアは言った。『わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように』**」。(ルカ1:38)

このようにエリザベトもマリアも、**神様のわざ、聖霊のお働き**に全く身を委ねています。そういう意味では女の方は凄いなと思います。自分の体の中に、神様からの新しい命を受けると言うことが起こる。その可能性を持っている。マリアがエリザベトの所を訪れた時、エリザベトが「**あなたが挨拶をした時、私の胎の子が喜び踊りました**」という箇所がありますが、二人の笑顔も想像出来る、新約聖書でもとても美しい場面だと思います。その後でエリザベトが語った言葉があるのですが、これも大事な言葉だなあと思いました。「**主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いです**」。(ルカ1:45)

## [2] バプテスマのヨハネの洗礼

このエリザベトの言葉は、今日の場面に繋がっているように思えるのです。他の福音書を読むとバプテスマのヨハネはユダヤの人々にかなり厳しい言葉を、神からの言葉として語っています。しかし、人々はそれを真剣に聞いて、続々と列をなしてヨルダン川で**洗礼**を受けるのです。長〜い空白を経て、今、神様がメッセージを与えている。それは一言で言うならば「**あなたたち、もう一度出直してきなさい。あなたの道を整え、悔い改めなさい**」ということだと思います。メシアが訪れる。それは救いと同時に、神様の審判が下ると言うことでもある訳です。ですから神様の前に姿勢を正せということですが、その言葉を人々は神様からの言

葉として聞いたのです。決して耳障りの良い言葉ではないです。でも正に「**主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いです**」です。神様の言葉に応答する一大ムーブメントが起こった。これは**聖霊の業**ですね。

儀式としての「**洗礼**」というものはヨハネ以前にもあったようですが、基本的には、異邦人が受けるものであり、既に神様の民とされているユダヤ人は洗礼を受ける必要がないという考えが一般的だったようです。にも拘わらず、この時ヨハネが語るメッセージに心打たれ、「**主がおっしゃったことは必ず実現するぞ**」という心にされて多くのユダヤ人が洗礼を受けにやってきたのです。けれども面白くないのは「エルサレムのユダヤ人たち」（ヨハネ 1:19）です。権力を持った律法の専門家や宗教学者たちからすると、皆がヨハネになびいている、と。保身のため、新しい時代など来てほしくないのです。だから彼らは祭司などにヨハネのもとに行かせ、「あなたはどなたですか」と尋ねさせました。丁寧な言葉になっていますが「お前は何様か」ということですね。そこでヨハネが一貫して語っていることは、**自分はメシア(救い主)ではない、預言者エリアの再来でもないし、私は『主の道をまっすぐにする』存在、ただ来る救い主を皆が受け入れるための道を整える声の役割**をしているのだ、私はその方の履物の紐を解く資格さえないのだ、ということでした。このヨハネとイエス様は、人間的には従兄弟になりますよね。けれどもヨハネはわきまえています。自分は預言者、つまり人間。しかしイエスは神様から直接遣わされた方、私もまた彼に従うべき存在であると。

そして、**30 節以下**で、正にヨハネからイエスへ、新しい時代が始まっています。イエス様がヨハネの所に近づいて来られました。この時ヨハネはイエス様を見て、「**見よ、世の罪を除く神の小羊だ**」と言いました。旧約聖書の時代、小羊を供え物(いけにえ)にすることによって神様が人の罪や過ちを赦されましたけれども、今や新しい時代がやって来たのだ、**神様自らが神の子を送り、その者が、神様が備え給う小羊**となり、幾度も幾度も繰り返されてきたいけにえの儀式は終わるのだ、それは神様が人間に対して、裁きを下すというのではなく、(そのことを出来る方であるにも拘らずです) **人間を愛し、この神の小羊を受け入れる者は、神の子とされる資格を与えられる**ということでありました。この方は、全く聖なる方でありましたけれども、**罪人の一人**となって、悔い改める人間、そこから出直しをする**人間の代表**となって自ら洗礼を受ける列に加わられたのです。

32 節以下でヨハネはこう語っています。「そしてヨハネは証した。「わたしは、“**霊**”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、

『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を受ける人である』とわたしに言われた。わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証したのである。」

ヨハネの行ってきたことは、「宗教」としては最高の境地を示していました。イエス様も「女から生まれた者でバプテスマのヨハネほどの人はいない」と言われました。神様の前に自己を見つめ、悔い改めて心を平らかにすること、神様を畏れることを教えました。けれどもイエス・キリストがもたらしたものは「宗教」を超えているのです。「福音」なのですね。「あなたは赦された。赦されている。まるとご神様に受容されている。そこにはユダヤ人とか異邦人とかそんな区別は一切ない。その証拠に、わたしは、自分の命と引き換えに、神の命、永遠の命をあなたに与える。」—この日、イエス様洗礼の日は、あのゴルゴタの十字架の犠牲に直結しています。イエス様は、十字架で「神の小羊」になって下さったのです。

### [3] 洗礼は、洗礼を受けられたイエス様に繋がること

私たちが洗礼(バプテスマ)を受けたこと、受けるということは、ある意味洗礼を受けて下さったイエス様にあやかること、繋がることだと言って良いのかもしれませんが。それは素晴らしい恵みです。ヨハネの方にイエス様が近づいて来られたように、今イエス様は私たちの方に近づいてきて下さっています。「わたしはあなたのための神の小羊だ。わたしをもう一度受け入れて、新しい出発をしないか」と言っておられると思うのです。今日は年末の礼拝です。でも今は丁度イエス様がこの世に来られたクリスマスを初日として、新しい一年が始まったとも言えます。詩編の中にもありますが「わたしの時は御手の中にあります」。今年一年、色々なことが皆さんあったでしょう。私などは後悔が多い一年でした。皆さんにもつまづきを与えてしまったことが多々あったのではないのでしょうか。どうぞお許し下さい。皆さんの歩みの中にも辛かった経験、思いがけない出来事もあったかもしれませんが。それでも、私たちの時間はすべて御手の中にあります。赦しの中にあります。この「時」という「列」の中に、イエス様も居て下さるのです。ですから、私たちはどんな時も孤独ではありません。傷ついたならば、一緒にリハビリの過程を体験して下さい。私たちが「わたしもあなたの重荷を負うから、あなたもわたしに学びなさい」と、どこまでも私たちを手放さないお方がイエス様です。私たちはもう一度バプテスマを受ける必要はないですけれども、聖霊によってまた新たに捕えて頂いて、新年、新しい出発をさせて頂きたいと思えます。今年一年、毎週ご一緒に礼拝を捧げられましたことを感謝します。ご一緒に新たな年を迎えましょう。

お祈りを致します。